

巻頭言：

名古屋学芸大学健康・栄養研究所の特徴を存分に生かす
活動の“たたき台”を

研究所長 足立己幸

2011年3月11日に起きたマグネチュード9.0の地震・津波は現代の科学・技術では想定できない超大型であった。福島第一原子力発電所事故はさらにすべての予想を超えた。これらが人々の心身の健康・生活・生産・社会活動等すべてに及ぼす影響は甚大で、多様で、計り知れない。さらにこのことをめぐって世界中の人びとも影響を受け、考え、様々な行動を起こしている。人間が何に向かって、どう生きるか、環境をどう生かし、共生していくか？ 科学・技術・人間観・世界観等について原点からの問い直しがされている。

年報第5号はこの歴史的な年の名古屋学芸大学健康・栄養研究所（以下、研究所）活動の軌跡にあたる。多くの方々の協力によって、無事発行され、広く活用できることを感謝申し上げる。

研究所は2004年4月、大学院設置と共に出発し、初代山中克己研究所長のリーダーシップの下、主として大学内における研究所活動の基礎づくりが行われた（第一期と呼ぶことが出来る）。本年度は名古屋学芸大学大学院第1号の博士誕生を機に、研究所設置の主旨でもある“社会に大きな窓を開き、特徴を存分に発揮し、学内外へ貢献する研究所”を自覚しつつ実行できるように、研究所規程の一部改正を行った。いわば、研究所第2期の入口に立った、と言える。

例えば、第2条目的で“研究所は、人間の健康と栄養に関して社会との連携を重視しながら研究や実践をすすめるとともに、行政、企業または個人等からの委託研究や実践課題を受託して研究や実践をすすめること”とした。そして第2条では“課題に対応して大学の教員や関連組織と複合的、有機的な連携を図って研究や実践をすすめる。そのためにライフステージ・栄養・ヘルスプロモーション、臨床栄養、食生態・食育、食品機能・安全、ヒューマンケア、メディア造形、健康・食、比較食文化・国際栄養の各分野を置く”こととした。

大学教員による研究所研究員に加えて、学外から客員研究員や研修生の受け入れを位置づけたことも、社会資源との積極的な連携で、質の高い研究と実践をめざすあらわれである。

第5号は総説に井形昭弘学長の歴史的なレビューをふまえた臨床研究への展望をいただき、論文等は遺伝子レベルから地域レベルまで、実験・統計手法から地域分析・専門家養成プログラム形成まで、新規性の高い研究論文に並んで学生を含めた震災地支援活動報告等、多様な内容で構成された。研究計画・方法・結果や討論等について、今後も十分に熟成した水準をめざして努力を続けたい。

外壁を固く守り、内容や表現法を固定化しがちな多くの学会誌とは異なり、研究と実践の両側から、又は両者の間から、“健康と栄養に関して社会との関連を重視しながら研究と実践をすすめる”討論を介して、冒頭に示した“計り知れない課題”解決に対応できる新視点や方法論創生のたたき台にしてほしい。

2012年6月